

## 「光とやみ」

ヨハネの福音書 3:17~36

### 1. 世

3:17 神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。

3:18 御子を信じる者はさばかれぬ。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかったため、すでにさばかれている。

「世」という日本語が持つ言葉の概念では、どうしてもこの世、現世、この世界、この時代となってしまいます。しかしヘブル語では、オラーム(אֵלָם)で「永続、永遠、昔」を意味する言葉が使われており、世に対する捉え方が大きく違うことが解ります。つまり神が御子をこの世、この時代、この世界に遣わされたのではなく、「永遠の昔」に遣わされたということになり、これは天地創造の御業を御子にお任せになったことを意味していると考えられます。そしてそれは御子を信じる者が救われるためですが、御子による救いは一回限りのものではなく、継続、永続するものです。ですから「世が救われる」とは「永遠に救われる」永遠に救われた状態であり続けることを意味していると考えられます。ですから御子を信じない者に下されるさばきもまた然り、永遠にさばかれる、永続してさばかれ続けるので、救われることは永遠にありえません。

### 2. 光とやみ

3:19 そのさばきというのは、こうである。光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行いが悪かったからである。

このみことばをより深く理解するには、光とやみが何であるかを理解する必要があります。ヘブル語で見ましょう。まず光はオール(אור)です。

アーレフ(א)…雄牛を象った、直接的に神を表す文字です。

第一、初めという意味もあります。

ヴァーヴ(ו)…釘を象った文字です。上から、天から地に

下されるもの、固定、決定などの意味があります。

レーシュ(ר)…頭を象った文字です。思考、考え、計画という意味があります。



これら三つの意味を合わせると「初めに神が固定した、決定した考え、計画」を意味しています。

そしてやみはホシェフ(חשך)といいます。



ヘット(ח)…柵、塀を象った文字です。隔たり、限界、境界をもった人の歩み、人生を意味します。

シーン(ש)…歯を象った文字です。嚙む、味わうという概念から、形あるもの、身体という意味があります。

カフ(כ)…掌を象った文字です。受け取る、捉える、適用するという意味があります。

これら三つの文字を合わせると「神を味わい、賜物を受け取ることからの隔たり、断絶」を意味していると考えられます。

### 3. 悪

光が世に来ている、つまり神様のご計画が永遠の昔に揺るがないものとして定められたのに、やみすなわちその神様のご計画を断絶、拒絶した人々のことが記されています。その理由は人々の行いが悪かったからだと思われていますが、何が悪かったのでしょうか。そもそも悪いとは、悪とは一体何でしょうか。ヘブル語のラー(לר)がそれにあたる言葉です。頭、思考を意味するレーシュ(ר)と、目、見ることを意味するアイン(ע)によって成り立つ言葉です。「目で見て考える」こと、また「目をかしらとする、目に従う、見えるものに支配される」これがラーの持つ概念です。自分の目で見たもの、見えるものによって考える、判断する生き方です。つまり目に見えるものしか認めない、信じない考え方が悪だということです。

あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。(創世記 3:5)

目という言葉が聖書で最初に使われるのがこの箇所です。これは神様の言葉ではありません。サタンの言葉です。「目が開かれる」という表現は、一見素晴らしいことのように感じられますが、もともとは人間がサタンに聞き従った結果生まれた言葉です。目に見えない神様に従うのではなく、目に見えるものに従う、左右される、影響を受ける、支配されることが悪だと聖書は言うのです。見えるものと記されていますが、これは五感を象徴するものと考えべきです。つまりこの肉体の機能で感じられるものだけに捕らわれた考え方、生き方が悪なのです。見えるものに惑わされてはならないことを、聖書は再三に渡って警告しています。

しかし主はサムエルに仰せられた。「彼の容貌や、背の高さを見てはならない。わたしは彼を退けている。人が見るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、主は心を見る。(Iサムエル 16:7)

私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。(IIコリント 4:18)

信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです。(ヘブル 11:1)

3:20 悪いことをする者は光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。

悪、ラーすなわち見えるものに支配されている者は、光、オールすなわち目に見えない神様のご計画を受け入れられません。「恐れて」とありますが、これは恐れる対象を受け入れない、信頼していない表れであり、また自分で自分を守ろうとする気持ち「私は私のものだ」という気持ちの表れです。要するに誰かの言いなりになりたくない、それがたとえ神様でも聞き従いたくない、だから光オールのほうに来ないのです。

#### 4. 真理

3:21 しかし、真理を行う者は、光のほうに来る。その行いが神にあってなされたことが明らかにされるためである。

悪とは逆に真理、エメト(אמת)は光に向かいます。つまり真理は、光と同じ方向性、目的を持つということです。この真理もヘブル語から考えてみましょう。



アーレフ(א)…神を直接的に表す文字です。初めという意味もあります。

メーム(מ)…水を象った文字です。水は天地創造の前から存在していました(創世記 1:2)。

ターヴ(ת)…しるし、烙印、刻印を象った文字です。選びという意味があり、またアーレフに対してターヴは終わり、完成を意味する文字でもあります。

これら三つの文字の意味を合わせると「天地創造の前から、永遠の昔から存在する神様の選び」となります。つまり真理を行う者とは神様に選ばれた者、神様のご計画を遂行する者です。そしてそのご計画の内容が、エメトが聖書で最初に使われた出来事に記されています。

そうして私はひざまずき、主を礼拝し、私の主人アブラハムの神、主を賛美しました。主は私の主人の兄弟の娘を、主人の息子にめとるために、私を正しい道に導いてくださったのです。(創世記 24:48)

この「正しい道」と訳されているのが聖書でエメトが最初に使われた箇所です。それはアブラハムがイサクのために、父が息子のために結婚相手、花嫁を探すことであったことが解ります。つまり父なる神様のご計画とは、御子イエシュアに花嫁を迎えることにあります。イエシュアの花嫁とは、永遠の昔から神様にあって選ばれた者たち、イエシュアをメシア、すなわちキリストと信じる者たち、花嫁なる教会を意味しています。

#### 5. 先駆者

3:22 その後、イエスは弟子たちと、ユダヤの地に行き、彼らとともにそこに滞在して、バプテスマを授けておられた。

3:23 一方ヨハネもサリムに近いアイノンでバプテスマを授けていた。そこには水が多かったからである。人々は次々にやって来て、バプテスマを受けていた。

3:24 ——ヨハネは、まだ投獄されていなかったからである——

イエシュアと弟子たちはユダヤの地で、ヨハネはサリムに近いアイノンでバプテスマを授けていました。ユダヤ地方はイエシュアがヨハネの前に現れるまで、ヨハネがバプテスマを授けていた場所です。その後ヨハネはそこから北のサマリヤ地方に移動してサリムという場所の近くの



アイノン、アイノンとは泉という意味ですが、そこに移動します。この動きにも意味があります。ヨハネは自分についてこう言っていました。

「主の道をまっすぐにせよ」と荒野で叫んでいる者の声です。(ヨハネ 1:23)

そしてイエシュアについてはこう言っています

その方は私のあとから来られる方 (ヨハネ 1:27)

つまりヨハネは、イエシュアが通られる道を用意する者、つまり先に進む、先に来る者だということです。ですからこれは 4 章の話になりますが、イエシュアはこのユダヤ地方に滞在されて後、次にサマリヤ地方に移動されるということがこの時点で解ります。しかしヨハネの先駆者としての働きはこのサリムまでです。この後まもなくヨハネは投獄され、処刑されます。サリムという地名は、ヘブル語発音ではシャーレーム(שלום)です。シャーレームとは「完成する、完了する」という意味です。イエシュアも十字架上で息を引き取られる際にこの言葉を発せられます。

## 6. バプテスマ

ともかくヨハネだけでなくイエシュアもまたバプテスマを授けられたという記述は非常に興味深いことです。正確にはイエシュアではなく弟子たちが授けていたのですが、バプテスマについて今一度学ぶ必要性を感じました。ヨハネとイエシュアを結ぶこのバプテスマとは一体何を意味するのでしょうか。

バプテスマは「浸す、沈める」という意味のギリシャ語ですが、ヘブル語ではターヴァル(טָבַל)といい、同じような意味を持っていますが、聖書でターヴァルが使われるほとんどの場合、浸すものが違います。

彼らはヨセフの長服を取り、雄やぎをほふって、その血に、その長服を浸した。(創世記 37:31)

血に浸す、すなわち死を意味する言葉なのです。しかしその死は、このみことばにあるように、雄やぎを殺してその血にヨセフの服を「浸し」てヨセフが死んだことにする、つまり身代わりの死です。これは明らかにイエシュアの十字架の死を表していると考えられます。しかしここでヨハネやイエシュアの弟子たちが行っているバプテスマ、ターヴァルは「水が多かった」とあるように、水に浸すことが強調されています。そしてバプテスマとは身体を水に浸すことです。旧約聖書の中に、身体を水に浸す、ターヴァルする出来事は二つしかありません。一つはヨシュア記にありますイスラエルの民がエジプトを脱出して 40 年の荒野での放浪生活を終えて、約束の地カナンに入る場面です。

### ヨシュア記

3:15 箱をかつぐ者がヨルダン川まで来て、箱をかつぐ祭司たちの足が水ぎわに浸ったとき、——ヨルダン川は刈り入れの間中、岸いっぱいにあふれるのだが——

3:17 主の契約の箱をかつぐ祭司たちがヨルダン川の真ん中のかわいた地にしっかりと立つうちに、イスラエル全体は、かわいた地を通り、ついに民はすべてヨルダン川を渡り終わった。

川の水はせき止められましたが、イスラエルの民は岸いっぱいにあふれるヨルダン川に浸ったのです。このイスラエルのカナン侵攻は、イエシュア再臨の型、すなわちイスラエルの12部族が集められ、神様がアブラハムとその子孫に与えると約束されたカナンの地が、完全にその所有となり、再臨されたイエシュアを王とし、イスラエルの12部族を中心とする神の国が建て上がることを意味しています。水のバプテスマ、ターヴァルが指し示す一つ目の出来事がこれです。

そして二つ目は第二列王記にありますアラムの将軍ナアマンに起こった出来事です。

そこで、ナアマンは下って行き、神の人の言ったとおりに、ヨルダン川に七たび身を浸した。すると彼のからだは元どおりになって、幼子のからだのようになり、きよくなった。(列王記Ⅱ5:14)

全身を皮膚病に犯されていたナアマンは神様に聞き従い、ヨルダンの水に身を浸し、完全に癒され、きよくされました。ここに神の国に入る者に約束されたもう一つの真実、新しい身体、朽ちることのない永遠の身体、その型が記されていると考えられます。因みにナアマンはアラム人、すなわち異邦人でした。

このように、水に身を浸す、ターヴァルする行為はイスラエルすなわちユダヤ人とそして異邦人に表された神の国、御国の啓示であると考えられます。それはターヴァルを構成するヘブル文字を見ても明らかです。

テット(ט)…蛇を象った文字です。知恵、知識、賢さを意味します。

ベート(ב)…家を象った文字です。神の家、御国を直接的に指し示す文字です。

ラーメド(ל)…杖を象った文字です。学ぶ、訓練することを意味しています。



これら三つの文字が持つ意味を合わせると「知恵をもって御国を学ぶ」ことがターヴァルであることが解ります。ですから御国を思い、神様のご計画を学ぶために私たちはバプテスマを受けたのだということを覚えなければなりません。

## 7. ねたみ

3:25 それで、ヨハネの弟子たちが、あるユダヤ人ときよめについて論議した。

3:26 彼らはヨハネのところに来て言った。「先生。見てください。ヨルダンの向こう岸であなたといっしょにいて、あなたが証言なさったあの方が、バプテスマを授けておられます。そして、みなあの方のほうへ行きます。」

ヨハネの弟子たちがイエシュアを妬んでいることが解ります。ここにイエシュア (の弟子たち) がバプテスマ

を授けているもう一つの理由があります。

#### ローマ人への手紙

11:11 では、尋ねましょう。彼らがつまずいたのは倒れるためなのでしょうか。絶対にそんなことはありません。かえって、彼らの違反によって、救いが異邦人に及んだのです。それは、イスラエルに**ねたみを起こさせるため**です。

11:12 もし彼らの違反が世界の富となり、彼らの失敗が異邦人の富となるのなら、彼らの完成は、それ以上の、どんなにかすばらしいものを、もたらすことでしょう。

イエシュアはヨハネと同じバプテスマを行うことで、ヨハネの弟子たちに妬みを起こさせました。ここにイスラエルの異邦人に対する妬みの型が表されていると考えられます。そしてその妬みがイスラエルの回復、完成を「どんなにかすばらしいもの」にするかということを表そうとしておられるのだと思われます。

#### 8. すぐれた人

3:27 ヨハネは答えて言った。「人は、天から与えられるのでなければ、何も受けることはできません。

3:28 あなたがたこそ、『私はキリストではなく、その前に遣わされた者である』と私が言ったことの証人です。

3:29 花嫁を迎える者は花婿です。そこにいて、花婿のことばに耳を傾けているその友人は、花婿の声を聞いて大いに喜びます。それで、私もその喜びで満たされているのです。

3:30 あの方は盛んになり私は衰えなければなりません。」

イエシュアはバプテスマのヨハネについてこう表現しています。

まことに、あなたがたに告げます。女から生まれた者の中で、バプテスマのヨハネよりすぐれた人は出ませんでした。(マタイ 11:11)

いかにヨハネがすぐれていたかが 27~29 節で解ります。ヨハネは「キリストの前に遣わされた者」すなわち旧約聖書の時代の預言者である自分の存在と役割をしっかりと理解していました。しかし旧約の預言者たちやアブラハム、モーセ、ダビデといった者たちが、断片的にしか理解していなかった神様のご計画が、いかなるものであるのかを正確に理解していました。花婿と花嫁、神様のご計画が結婚に表されるものであることをヨハネは理解していたのです。聖書の中でイエシュアより先に神様のご計画を結婚にたとえた人物は、このヨハネ以外にはありません。そしてヨハネは、自分は花婿の友人であると理解して、この結婚を大いに喜んでいるのです。このようにバプテスマのヨハネという人物は、神様のご計画の本質を理解し、かつそれをイエシュアの中に見出し、喜び迎える者だったのです。

それだけにとどまらず、ヨハネがいかに深くイエシュアについて理解していたかが次に記されています。

3:31 上から来る方は、すべてのものの上におられ、地から出る者は地に属し、地のことばを話す。天から来る方は、すべてのものの上におられる。



花婿であるイエシュアは、上から、天から来られる方、そしてすべてのものの上におられた方であるということ  
をヨハネは理解していました。

3:32 この方は見たこと、また聞いたことをあかしされるが、だれもそのあかしを受け入れない。

イエシュアはあかしされます。しかしそれはご自分についてではなくて、ご自分が見たもの、聞かされたもの  
についてです。それはすなわち神様が描いた絵、VISION を見たのであり、そのご計画の全てを聞かされた  
ということです。

3:33 そのあかしを受け入れた者は、神は真実であるということに確認の印を押したのである。

そのイエシュアのあかし、すなわち神様のご計画を受け入れることが、神は「真実」、ヘブル語でアーメン  
(אמן)、いわゆるアーメンという祈りの告白「神様を信じる、信じます」ということです。

3:34 神がお遣わしになった方は、神のこぼ話を話される。神  
が御霊を無限に与えられるからである。

3:35 父は御子を愛しておられ、万物を御子の手にお渡しにな  
った。

イエシュアは、父なる神様がお遣わしになった神の御子であり、  
万物を創造された方であり、父が愛する、アーハヴ(אהב), そ  
の御国のご計画そのものであることをヨハネは理解していま  
した。



3:36 御子を信じる者は永遠のいのちを持つが、御子に聞き従わない者は、いのちを見ることなく、神の  
怒りがその上にとどまる。

そして御子を信じない者、すなわちイエシュアのあかし、神様のご計画を受け入れない者に対する神の怒り、  
裁きも理解していました。

これだけの情報量を、イエシュアが現れる前の人、すなわち旧約の預言者であるヨハネが理解していたとい  
うのは驚異的です。なぜ彼がこれだけの知識を持つことができたのか。イエシュアも認める人類史上最もすぐれ  
た人物は、いかにしてこれだけの真理を理解できたのか、その理由は、彼の名前が意味するように「神の恵み」  
という他ないのかもしれませんが。しかし神様が、人間の優劣、どれくらい優れているかという基準を、その人  
が理解している神様に関する、そのご計画に関する知識の量で判断されるのは、聖書全体を見ても確かなよう  
です。ですから私たちはもっとよく知らねばなりません。「求めなさい、そうすれば与えられます」(マタイ  
7:7) というみことばがありますが、この神様のご計画である御国については、もっと過激な表現が記されて  
います。

マタイ

11:11 まことに、あなたがたに告げます。女から生まれた者の中で、バプテスマのヨハネよりすぐれた人は  
出ませんでした。しかも、天の御国の一番小さい者でも、彼より偉大です。

11:12 バプテスマのヨハネの日以来今日まで、天の御国は激しく攻められています。そして、激しく攻める者たちがそれを奪い取っています

この神様のご計画である「御国」を知るには、「求める」程度では得られません。「激しく攻める」ことで得られるものであることが解ります。バプテスマのヨハネの神様のご計画に関するこのすぐれた理解は、彼の「激しく攻める」ような探究心に裏付けられていると考えられます。「荒野で叫ぶ声」は神様の通られる道を整え、平らにしました。すなわち神様のご計画をまっすぐに理解できるようにさせたのです。

荒野に呼ばれる者の声がする。「主の道を整えよ。荒地で、私たちの神のために、大路を平らにせよ。(イザヤ 40:3)